

# 赤塚公園の植生と鳥の関係

橋本啓史

〔目的〕どのような環境が鳥たちにとって住み易いかを知るのと同時に、赤塚公園の鳥に関する総合的な資料を残す。

〔方法〕鳥たちがどのような環境に好んで現れるかを調べるために、ラインセンサス法を用いて季節ごとに傾向を調べると、鳥たちがどのような環境のどの種の樹木に営巣して繁殖しているのかを調べるために、公園全域をくまなく歩き業を捜す営巣調査を行った。

ラインセンサス法を用いた調査では、図1のコースを約25分で歩き、左右それぞれ25mの幅に現れた鳥の種名、羽数、現れた環境を記録した。この調査を毎週行い、1年間で52回行った。環境は20に分けて調査したが、ここでは5環境に大きく分けて述べる。また、一つの環境の面積が異なるため、面積あたりの割合を出して比較した。

営巣調査は、暮れから春を付けて見ておいた上で、6月11日の4時限に調査を行った。その後も明らかに1994年に使用されたと思われる古巣は追加した。

〔結果〕ラインセンサス法を用いた調査の結果は、図2の円グラフのようになった。季節ごとに見ると、羽数の春夏秋冬は落葉広葉樹が一番多いが、秋は常緑針葉樹が一番多かった。

営巣調査では、ハシボソガラス（アカマツに営巣）、オナガ（アカマツに営巣）、キジバト（ケヤキに営巣）の3例の巣を発見することができた。〔考察〕まず羽数で見ると、秋に常緑針葉樹が一番になった理由としては、面積が広いということもあるが、アカマツ林でアカマツの巣が熟す時期でありシジュウカラが多く観察されたこと、冬に近づくアカマツ林の地面で採餌するキジバトが多く観察されたことがあげられる。

常緑針葉樹の中を比較すると、アカマツが他の樹種に比べてはるかに多い。これは面積が広いこともあるが、面積あたりで比べてもスギの2倍の羽数が観察されている。この理由としては、図3でアカマツとスギの自然樹形を比較してみると、アカマツでは隙間が多く鳥が入りやすいが、スギでは葉が密に繁って内部を隠しているので、大型の鳥は枝に止まりにくく、ペンなどには止まることができない上に、内部に小鳥がいたとしても、調査をしていても発見しにくいという

ことがあげられる。またアカマツは林になっているが、スギは独立木に近いものがほとんどなので、林内の枯れた下枝の利用もほとんど見られない。

落葉針葉樹は春夏秋冬は少ないが、冬は葉が落ちて鳥も止まりやすいし、観察もしやすい。冬の羽数の面積あたりでは2番目に多いが、これは冬は葉が落ちて鳥が集まることを示していると言えるのではないだろうか。

常緑広葉樹の記録が少ないのは上2つと同じで鳥が入りにくいこと、観察しにくいという理由からであろう。逆に落葉広葉樹が多いのは、冬に葉が落ちることと、スギのように葉が繁っていないものが多いからであろう。

次に種数であるが、年間では落葉広葉樹が一番多かった。2番目の常緑針葉樹は、アカマツだけが多くの種類を記録していた。アカマツは面積が広いということもあるが、松の実が秋冬では多くの種類を呼び寄せているのではないだろうか。

面積あたりでは、大きく順番が異なるが、種類数は面積に比例するものではないと思われるので、この順位はあまり意味がないと思われる。

赤塚公園にはやぶがほとんどないので、植え込みがその役割を果たしていると思っていたが、まとまった面積がなく、人も近づきやすいため、あまり利用されていなかった。

営巣調査では、わずかに3例の巣を発見しただけであったので、どのような環境を好んで営巣しているのかは分からなかった。しかしこの調査から、赤塚公園では、やぶや樹洞に営巣する鳥は営巣しにくそうということが分かった。

以上のことより鳥たちにとって住みやすい環境を推察すると、落葉樹特に落葉広葉樹とアカマツ林が良さそうである。そして大きな木になっていけば、樹洞などができたり、大きな巣も支えることができ、営巣地としても利用されるであろう。また、まとまったやぶは生息地としても営巣地としても重要であろう。しかし、下草刈りのされた林も地面で採餌する鳥にとって重要な場所であるため、両方必要であろう。ただしこれらのことは山野の鳥のみに通用するものである。

〔感想〕営巣調査はうまくいかなかったが、全体としては、鳥たちにとって住みやすい環境がおぼろげながらも見えてきてよかった。

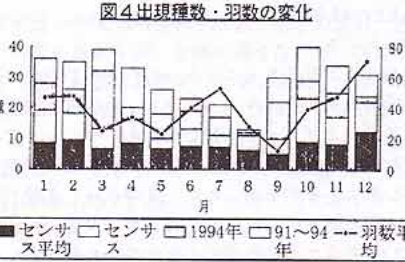
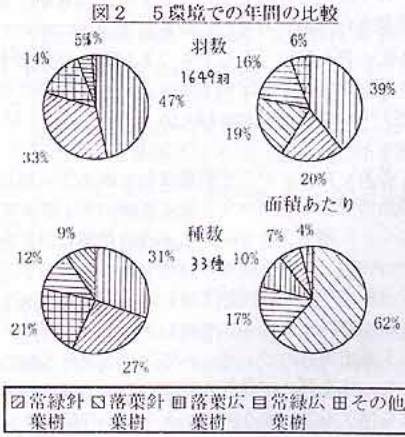
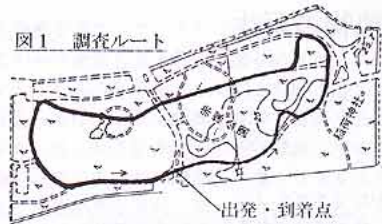


表1. 赤塚公園の鳥類リスト

種名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 ゴイサギ												
2 ダイサギ												
3 コサギ	○	○	△	○	○	●			△	△		
4 アオサギ									△			
5 コハクチョウ	△	△										
6 カルガモ	●	●	△	△				○	△	△		
7 コガモ	△	○	○	△					△	△		
8 オカヨシガモ												
9 ハシビロガモ												
10 ツミ				○	△	△	△	△	△	△		
11 コジュケイ		△	△	△	△	△	△	△	△	△		
12 キジ	△											
13 キジバト	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
14 カッコウ												
15 ツツドリ												
16 ホトトギス												
17 フクロウ	△											
18 アマツバメ												
19 カワセミ												
20 コダラ	●	○	●	○	●	○	●	○	●	○	●	○
21 ヒバリ												
22 ツバメ												
23 キセキレイ												
24 ハクセキレイ	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
25 セグロセキレイ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
26 ビンズイ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
27 ヒヨドリ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
28 モズ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
29 ジョウビタキ	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
30 トラツグミ	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
31 アカハラ	●	△	△	△	●	△	△	△	●	△	△	△
32 シロハラ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
33 ツグミ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
34 ウグイス	○	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
35 キクイタダキ	△											
36 キビタキ												
37 エゾビタキ												
38 コサメビタキ												
39 エナガ	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△
40 ヒガラ	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
41 ヤマガラ	△											
42 シジュウカラ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
43 メジロ	○	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
44 ホオジロ	●	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
45 カシラダカ	○	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
46 アオジ	○	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
47 アトリ	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
48 カワラヒワ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
49 マヒワ	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
50 ベニマシコ	○											
51 シメ	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
52 スズメ	○	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
53 ムクドリ	○	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
54 カケス	○	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
55 オナガ	●	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○
56 ハシボソガラス	●	●	○	●	●	○	●	●	○	●	●	○
57 ハシブトガラス	○	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	○

●は1994年のラインセンサス時の記録、○は1991年のその他の記録、△は1991年から1993年のみの記録。